

西南学院大学剣道部 100 年通史

－ 1921（大正 10）年～ 2021（令和 3）年－

高松 千博

はじめに

この稿では、西南学院大学剣道部の創部から 100 周年までの通史を記述する。問題は執筆のための資料が少ないことである。小生は、『西南学院百年史』（2019.3）を編纂するために西南学院資料センターに奉職していたので、学院所蔵の歴史資料はほぼ把握していたが、剣道部に関する資料は少なく、断片的であった。学院所蔵の資料以外に、剣道部 OB・OG のみなさんから貴重な資料を寄贈していただいたのがせめてもの救いであった。数少ない資料をつなぎ合わせながら、なんとか執筆の責任を果たすことをご容赦願いたい。

1. 大正から昭和初期の時代

（1）大正 10（1921）年の高等学部開設と同時に創部

西南学院大学は、1949（昭和 24）年に新制大学として開設された。大学の前身は、1921（大正 10）年に開設された西南学院高等学部（4 年制）である。剣道部の創部は、高等学部の開設年度に発行された『西南学院一覽』の高等学部学生会規約に「剣道部を設く」とあり、剣道部は 1921（大正 10）年に高等学部開設と同時に創部された。硬式野球部と共に創部され、古い歴史を持つ。

創部時に何人の部員がいたのかは不明だが、創部から 4 年後の 1925（大正 14）年 3 月に剣道部最初の卒業生 2 人が卒業した。このようにして産声を上げた剣道部は 2021（令和 3）年に創部 100 周年を迎えた。

（2）武徳殿を譲り受けた道場と「日曜日問題」

創部当初は、木造の雨天体操場で練習をしていた。その後、赤坂門にあった武徳殿が新しく東公園に建てられることになり、同施設を譲り受けて 1930（昭和 5）年 4 月、運動場（現大学東キャンパス）の一角に武道場が移転・完成した。当時としては県下でも数少ない立派な道場で、1 階東側半分が剣道場、西側半分が柔道場になっていた。

武道場の北半分は半地下になっており、そこに剣道部の部室があった。かなり後になるが、1958（昭和33）年の卒業アルバムには、「剣道部」の表札がかかった同部室の前で撮った部員たちの写真がある。いずれの建物も現大学博物館の北側に位置していた。

1928（昭和3）年、学院では「日曜日問題」と呼ばれる事件が起きた。剣道部も無関係ではなかった。日曜日は安息日であり、高等学部では日曜日の対外試合などが禁止されていた。同年7月、野球部は日曜日に試合を行い、試合には勝ったものの、学院から部の解散を命ぜられた。その後、日曜日の対外試合は条件付きで緩和されることになったが、原則は変わらなかった。1941（昭和16）年高等学部英文科卒の剣道部員清原睦彦は当時を振り返って、「昔は日曜日は安息日として、試合はもちろん練習もできず、春秋2回の六高専リーグ戦剣道大会のスケジュールも相手校に頼んでウイークデーにしてもらった」と記している（『紺碧 西南体育会の歩み 創刊号』1967（昭和42）7）。

（3）部歌の誕生

現在も歌い継がれている部歌「潮、玄海に高鳴りて・・・」は、1928（昭和3）年6月に作成されたが、その経緯は判然としない。作曲は、当時西南学院高等学部の音楽担当教員の中井義男、作詞は同じく高等学部教員の杉本勝次である。杉本は後に西南学院理事長となり、その後、政界に出て福岡県知事、久留米市長などを歴任した。

（4）昭和初期の剣道部の活躍

学院に存在する高等学部剣道部の写真として最も古いものが1930（昭和5）年の高等学部卒業アルバム掲載の写真である。当時の院長 G.W. ボールデンと一緒に写った部員の写真で、学生服を着た学生が優勝旗を持っており、防具着用が「青年大演武会 剣道優勝旗 大日本武徳会」と書かれた木製のプレートを持っている。同大会は京都で開催された武徳会の全国大会（1929（昭和4）年7月）で、西南剣道部は同大会で優勝の栄冠を勝ち得たのである。翌1931（昭和6）年の卒業アルバムにも、松林をバックにした部員の写真が掲載されている。中央の学生がカップを持っているが、残念ながら何のカップかは分からない。写真上部分には「西南」が入った文字が書かれているが、詳細は不明である。

この頃の剣道部のコンパの写真も残っているが、中洲などの料亭で芸者さんをあげての懇親会で、今とは全く違ったものだった。なお、1935（昭和10）年6月の『西南学院新聞』には、剣道部が県内4高専対抗試合に出て、3位に終わったとの記事がある。



現存する最も古い剣道部の写真（1930年）

2. 戦前・戦中の時代

(1) 戦争と剣道部

1937（昭和12）年7月に日中戦争が始まった。この頃から勤労働員や軍事教練などで通常の学生生活（授業やクラブ活動など）を送るのは難しくなっていった。1941（昭和16）年12月の真珠湾攻撃で太平洋戦争が始まると、それはいっそう顕著になっていった。戦時中の1942（昭和17）年1月の『西南学院新聞』には「銃剣道部が神宮大会へ参加」との見出しが出ている。当時の卒業アルバムを見ると、剣道部と銃剣道部の写真が別々に掲載されているので、戦時中は銃剣道部が新たに設けられていたことが分かる。

戦時中に西南学院に在学し、終戦の年の1945（昭和20）年に西南学院経済専門学校（前年に高等学部を改称）を卒業した小西雄一郎について触れておきたい。1940（昭和15）年9月、文部省は全国の各学校に対し、学生の自治組織としての報国団を組織化するように指令を発した。学院は、1941（昭和16）年4月に学生・教職員で組織される西南学院報国団を結成した。名誉団長が院長、高等学部長と中学部長が団長を務め、学生の代表として代表幹事4人が選出された。1943（昭和18）年9月、その第4代表幹事に当時3年だった剣道部の小西が選出されたことが写真入りで『西南学院新聞』（1943（昭和18）.10）に掲載されている。小西は本学を卒業後、1954（昭和29）年10月に東京両国国技館で行われた第2回全日本剣道選手権大会で優勝している。また1964（昭和39）年3月に福岡で開催された全日本剣道七段大会で3位に入った。そして西南剣道部では、1955（昭和30）年から1968（昭和43）年までの長きに亘っ

て、師範を務めた。

3. 戦後の剣道部復活

(1) 長い年月を要した剣道部の復活

戦後、我が国から軍事色を一掃するということから、剣道・柔道は完全に学校教育から締め出された。西南の剣道部も1947（昭和22）年3月に卒業生を送り出したのを最後に、活動を休止せざるを得なかった。その後、1950（昭和25）年に全日本しない（竹刀）競技連盟、1952（昭和27）年に全日本剣道連盟がそれぞれ結成され、剣道もようやく活動の道が開かれるようになっていった。

西南剣道部が復活したのは1955（昭和30）年12月のことである。当時学生だった青沼道久（59期）ら7人が剣道部の復活に尽力し、同年12月18日、同好会として復活した。復活記念の集合写真には、7人の部員の名前とともに「昭和30年12月18日、同好会として発足す。思わば戦後10年の長きに亘り日の目を見ずと言えども、いかでこのまま剣がすたるべきや！かくて我が同胞はここに起ち上がったのであります」との熱いメッセージがしたためられている。戦後の復活まで、ずいぶんと長い年月を要した。

4. 昭和30年代

(1) 剣道部の活躍

戦績の記録として1956（昭和31）年に西日本大会で3位、翌1957（昭和32）年に第7回インカレで3位という記録が残っている（前掲『紺碧 西南体育会の歩み 創刊号』）。また、1958（昭和33）年には九州大会で準優勝し、戦後の復活後、初めて全国大会に出場した。残念ながら初出場の全国大会の記録は残っていない。その後、1962（昭和37）年の九州大会で5位に入賞し、2度目の全国大会に出場した。全国大会では1回戦は不戦勝、2回戦は北学大を敗り3回戦に進んだが、惜しくも関西大に敗れた。

1958（昭和33）年の卒業アルバムの中の剣道部員の集合写真は学院の武道場の前で撮影されており、その頃はまだ武道場で練習していた。しかし、それから3年後の1961（昭和36）年4月発行の『西南スポーツ』掲載の剣道部紹介には「部員二十余名は、先輩小西教範士のご指導の下で日夜西鉄道場で稽古に精進している」とあり、当時は学内には道場がなかったものと思われる。戦前・戦中・戦後を通じて長い間使われて来た武道場も昭和30年代前半に取り壊されたものと思われる。同年12月発行の『西南スポーツ』には「道場の早期建設を 剣道部」という見出しで「道場を一日も早く



学内に道場がない時代もあった

作ってもらいたい。道場はなくとも、来年こそはと、全員ガンバッテいます」との記事もある。昭和30年代後半から昭和40年代初頭にかけては、学内に道場はなく、学外の西鉄道場で稽古をしていた。これは、当時師範をしていた前述の小西や1939（昭和14）年卒の秋重昌司が西鉄に勤務していたことで、便宜を図ってくれたものと思われる。

(2) 剣友会の発足

1960（昭和35）年6月、剣道部OBで組織された「剣友会」が誕生した。会員は40人であった。6月4日に福岡市東中洲の料亭で28人が参加して発会式を行った。初代会長には、1934（昭和9）年卒の山本務が就任した。同年7月2日には、剣友会の発足を記念して、西鉄道場において、現役の剣道部との親善試合を行った。

発足以来60年が経過した2021（令和3）年4月現在、会員は500人を超えるまでに増えた。会費制を採用して現役学生を支援したり、「剣友会会報」の発刊、ホーム・ページの作成など活発な活動を行い、充実した組織となっている。現会長（6代目）は、2023年の4月から75期の武田壽一が務めている。

(3) 部誌の発刊

1964（昭和39）年、当時部員の古賀章夫が中心となって、剣道部部誌『剣風』を創刊した。現在保存されているのは同誌2号のみである。同誌2号はA5判全43ページから成るもので、当該年度の戦籍や部員の手紙などが掲載されていた。この部誌が、

その後いつまで刊行されたのかは不明である。

5. 昭和40年代以降

(1) ミッション大会、九州インカレで初優勝

1968（昭和43）年に仙台で行われた全日本基督教関係大学剣道大会（ミッション大会）において、本学剣道部が初優勝した。1回戦で上智大、2回戦で酪農学園大、3回戦で青山学院大を下し、優勝決定戦で東北学院大と対戦。3勝3敗1分けで代表決定戦となり、西南学院代表の2年生の神野泰隆がメンを連取し、優勝に輝いた。その後、1973（昭和48）年、明治学院大学で行われた同大会では団体戦優勝、個人戦でも3年生の武田壽一が優勝という偉業を成し遂げた。

一方、1970（昭和45）年に本学で行われた九州地区大学大会（九州インカレ）において、本学は準決勝で福岡教育大、決勝で久留米大を下し、初優勝した。その後、1977（昭和52）年の同大会でも優勝した。

(2) 新道場と新部室の完成

学内に道場がない時代がしばらく続き、並行して大学体育館建設の動きが出てきた。しかし、体育館建設には膨大な費用を要することから、一朝一夕には決まらず、当面、1967（昭和42）年に完成した第4号館の1階を仮の剣道場（東側）と柔道場（西側）として使用することになった。これは体育館建設までの仮の道場であった。この道場は体育館完成まで2年間使用され、その後は当初の予定通り教室に改装された。第4号館は、耐震補強を施して現在も教室棟として使用されている。念願の体育館は1969（昭和44）年10月に完成し、その1階に剣道場も新設された。

道場の推移については既述した通りだが、部室は、1960（昭和35）年前後に剣道場と剣道部部室が入っていた武道場が取り壊された後、どのような変遷をたどったかは明確な資料が残っていない。記録として残っているのは、1966（昭和41）年に、学院が郵政研修所跡地（現在の大学西キャンパス南側半分）を購入し、そこにあった木造2階建ての研修所を2年後の1968（昭和43）年からクラブ活動の部室として使用することになったということである。剣道部部室はその1階にあった。しかし、この施設は既に老朽化していて、雨漏りやシロアリの被害がひどかった。そうしたこともあって、同年、学術文化会を中心に、クラブの部室が入った学生会館建設の要望が大学宛に出された。学生会館建設についてはその運営をめぐる大学側と学生側に対立もあったが、1971（昭和46）年11月に「西南会館」として完成した。剣道部の部室は今と同じく5階にあった。それまでの木造の狭い隙間風が入る部室に比べると、

暖房設備もあり、隔世の感があった。

体育館と西南会館は、建設から50年余りが経ち、老朽化のため建て替えられることになった。2023（令和5）年には新体育館が完成し、2026（令和8）年には新西南会館が建設される予定になっている。

（3）初の女子部員入部と全九州大会初優勝

創部からちょうど50年目に当たる1971（昭和46）年4月、初めての女子部員が入部した。50年続いた男所帯についに終止符が打たれた。入部したのは西南学院短期大学部児童教育科に入学した酒井徳子。剣道の経験者で二段の有段者であった。2年間の在籍なので73期ということになる。

最初の入部者は酒井1人であったが、その後は、コンスタントに複数の女子部員が入部するようになり、好成績を収めるようになった。1986（昭和61）、1987（昭和62）年は全九州女子学生剣道大会で準優勝、そして1988（昭和63）年には同大会で初の優勝に輝いた。

（4）あと一步で西日本大会優勝を逃す

1971（昭和46）年5月に福岡の九電記念体育館で行われた西日本学生剣道大会では、本学は1回戦から準々決勝まで順調に勝ち進んだ。準決勝では九州産業大学との対戦となり、2勝1敗4分けで決勝戦に駒を進めた。決勝は福岡大学との対戦となった。試合は中堅戦まで3勝1敗と本学がリードし、あと1人勝てば同大会初の優勝というところまで行った。しかしながら、「あと1勝」が遠く、3勝4敗で準優勝に甘んじた。

6. 平成・令和の時代

（1）剣友会組織の充実と活動の活性化

1991（平成3）年に剣道部が創部70周年を迎えるにあたり、大学児童教育学科教員で剣道部監督だった高野一宏（76期）は、OB・OG間、OB・OGと現役間の連携を図る必要性を痛感し、機関紙の発刊を思い立った。そして、創部70周年の前年の1990（平成2）年3月、剣友会の賛同を得て『西南剣友会会報』創刊号を発刊した。しかしながら、この会報は4号で休刊となってしまった。

『剣友会会報 抜山蓋世』が再刊されたのは、2006（平成18）年に入ってからである。これに先立ち2000（平成12）年9月には学院の職員となった三苫正淳（90期）が中心となって剣友会のホームページを立ち上げた。

(2) 開学 50 周年記念学長杯争奪高校剣道大会を開催

西南学院大学は、1999（平成 11）年に開学 50 周年を迎えた。その年の 11 月 21 日、新制大学開学 50 周年を記念して学長杯争奪高校剣道大会を大学体育館で開催した。この大会は、剣道部出身の本学教職員で発案し、OB・OG、現役剣道部学生の協力を得て開催した。高校への呼びかけ、審判の依頼など OB・OG が手弁当で奮闘し、開催にこぎつけた。

福岡市内を中心に県内外の 37 校から 163 人（男子 86 人、女子 77 人）が参加して熱戦を繰り広げた。トーナメント方式の個人戦を行い、男子は東福岡高校の野口辰徳君、女子は唐津東高校の武野江梨子さんがそれぞれ優勝した。

(3) 創部 90 周年を祝う

2012（平成 24）年 11 月 17 日、西南学院大学剣友会は、創部 90 周年記念祝賀会を創部 90 周年の翌年に大学クロスプラザで開催した。夕刻から、OB・OG などを中心に関係者約 150 人が参加して祝賀会を開催し、創部 90 周年を盛大に祝った。創部から 90 年を経て、剣道部 OB・OG の総数は 489 人であった。

(4) コロナ禍と剣道部の活動

2020（令和 2）年に入り、新型コロナウイルス感染症が世界的に蔓延し始めた。日本では、同年 2 月 27 日、政府が緊急事態宣言を発表した。3 月に入り、小中高の各学校在臨時休校となる中、本学においても卒業式、入学式はリモートでの実施となり、授業も全てリモートでの実施となった。

剣道部では、恒例の春の合宿を中止した。この年、剣道部は 12 人の新入部員を迎えたが、4 月以降、稽古も中止となり、全九州学生剣道大会、西日本学生剣道大会、全日本学生剣道優勝大会などの試合も延期や中止となった。6 月に入り、第 1 波が流行消退期に入り、部活動も一旦緩和された。剣道部の稽古も 6 月下旬から再開されたが、マスクを装着し、メンの口元にはシールドを装着しての練習となった。その後、本学の学生にも感染者が出るなど第 2 波による感染拡大で、7 月下旬から稽古も再びできなくなった。9 月に入って感染状況が落ち着きを見せてきたこともあり、稽古を再開した。しかし、まずは面を着けずに素振りや木刀を用いての稽古を行い、2 週間ほど経過した後に面を着けての稽古を行った。時間も短縮して行った。

そうした中、延期となっていた全九州学生剣道大会が開催されることになった。11 月 1 日、久留米アリーナで開催された同大会では、試合時間の短縮や男子 5 人制など通常と異なる形式で行われた。結果は、男女ともにベスト 8 どまりだったが、部員一同、

試合ができたことに感謝した。しかし、2021（令和3）年1月14日、感染第3波による緊急事態宣言が政府から発表され、剣道部の活動も中止を余儀なくされた。

（5）創部 100 周年を迎える

西南剣道部は2021（令和3）年に創部100周年を迎えた。これに併せて100周年の様々な記念行事が剣友会の幹事会を中心に計画され、準備がなされていたが、コロナ禍の影響で大幅な見直しを余儀なくされた。当初の計画では、記念募金（2020～21）、記念式典・祝賀会（2021.8.14）、記念誌刊行（2021）、記念品製作（同）、県別複数年次別懇親会（同）、記念ゴルフ大会（同）などを実施予定であった。

しかし、コロナ禍の先行きが見通せないことを考慮し、2020（令和2）年11月の幹事会において、記念事業のうち2021（令和3）年12月の記念誌の刊行を除いて、他の事業は全て延期することを決定した。

その後、新型コロナウイルスの感染が落ち着いて来たことを受けて、2022（令和4）年12月17日に1年遅れで西南学院百年館において、創部100周年記念式典を開催した。会場には、来賓、OB・OG、現役員など約150人が出席した。また、翌2023（令和5）年5月に、新型コロナがインフルエンザと同じ5類感染症に移行して緩和されたことを受けて、同年8月13日には、ソラリア西鉄ホテルにおいて創部100周年記念祝賀会を開催し、OB・OGや現役学生など約150人が出席して創部100周年を祝った。



ソラリア西鉄ホテルで行われた創部100周年記念祝賀会での記念写真（2023年8月13日）